

家出少年の軌跡

常闇 狭間

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界には魔法が溢れている。同時に魔物も存在している。そんな世界を動かす七大家。

そのうちの『霞家』にすむ次男の「霞 遠也」。彼は霞家のなかの落ちこぼれと言われた。

あるひ、母親と喧嘩して飛び出した遠也。そこで吸血鬼の「ルヴィ・ノワール」と出会った。

彼女は遠也に家にくるよう提案する。そこで遠也の生活は一変。そんな記録を残そう。

これは、一人の落ちこぼれだった少年と吸血鬼の少女のお話。

目次

全ての始まり	1
どうやら俺は紹介されるようだ(意味深?)	8
特訓が始まる・・・と思つてました	16
急展開!? マンティコアと話して訓練して、あとあと!!	22

全ての始まり

俺は霞 遠也。あるとき、母親に呼ばれた。なんでも、大事な話があるそうだ。

これから俺の家柄について説明しようと思う。

『霞家』・・・世界七大家の一つ。魔法や武術、その他いろんなことにバランスよく

長けている。特に武術を専門に訓練される。当主は能力で決められる
完全な実力主義。

と言ったところか。今の候補として俺の兄がいる。だからか俺にはより厳しかった。
兄は俺とは違いイケメンで魔法ランクは幻龍級と言って最高ランク。しかも怒濤の
四属性使用可能と言ったチートぶり。それに比べ俺は魔法ランクは初級にも満たな
い

全くのダメ人間。実力がすべてなため努力や過程は気にも止めない。

「遠也、あなたは努力しているのですか!?!」

「当たり前だろ! その姿は何時もそばで見えていたじゃねーか!!」

「それでもこの結果はあり得ないわ!」

「あり得るあり得ないじゃなくて今この結果があるんだろ!!確かに俺は魔法も武術も指揮も戦術も全くとっていいほどダメだがな!努力はしっかりしてるよ!!」

「どうしてなの!?!妹の奈葉はもう上級なのよ!兄だつて幻龍級にはその年ではなつてたのに!」

「個人差や才能があるだろ!?!霞家つて傲慢するのにこんなことも知らねえのか!テメエは!」

「それでもよ!従兄弟は才能がなかったのに今では超級までつかえるの!」

結局俺のことは見てくれない。こんなのが親で良いのかよ。糞が!何が「従兄弟は」妹は」だ。

兄弟や親戚が出来るからつて俺にまで押し付けるのかよ。自分たちだつて結局中級しか使えずに

子供たちに負けてるつてのに。もういい、こんなところから出てつてやる。

「聞いているの!?!返事しなさいよ!どうせ何も出来ないただの人形のくせに!!」
ブチッ!

「……。」スタスタ

「返事もしないで何を勝手に出ていこうとしてるの!?!」

「……っ!」ピシャンッ!!

つい流れと勢いで家を出てしまった。でも外で死んだ方がまだよ。あんな個人を見ない家族と

なんていたくねえ。

「はあ、すっかり暗くなつたな。まああいつらもこれで喜んでくれるだろう。」

『何も出来ないただの人形のくせに!!』

「つ?!いや、喜びも悲しみもしないわな。そんなやつらだし。俺が大怪我をしても心配の素振りも

見せずにただ罵倒しただけだったし。」

さて、このあとは一体どうするか。特にあてもなくブラブラして餓死?それともここにずっといて

餓死?まあ、山の中にある家だったからなにか植物は食べれるだろう。まあ、襲われたらそこまで

だけだな。それよりも今日は満月・・・しかも赤い月か。最悪のタイミングで出てきたな。

「そのあなた、こんなところにいるの?吸血鬼に血を吸われるかもよ。」

「つ?!吸血鬼に血を吸われる・・・か。そうか、そういう死に方もするかもしれないのか。」

「ちよつと、聞いているの?」

「ん？ああ、スマン、考え事してた。あとその話し方やりづらいなら無理してやんなくてもいいぞ。」

敬語とかそういつた言葉には慣れてなきそうだし。」

「そういうわけにもいかないわ。霞家の人にタメ口なんて。」

「ああ、それなら問題ない。俺は霞家を抜けたからな。それに：いや、なんでもない。」
そう、俺なんかいなくなつていい。いや、そもそも霞家の一員として扱われてなかつた可能性まである。

というかもはや扱われなかつた。断言しよう。

「そうなの。じゃあ、敬語はやめるよ。」

「おう、やつぱり違和感がなくて接しやすいわ。」

「きみ、抜けたつてことはいくとこないんだよね？」

「まあ、そうだな。大丈夫だ。俺はここらで適当に餓死でも「だつたらー」？」

「僕の家にはこない？あ、ちゃんとした理由もあるよ。」

「お前の家には？まあいいや、理由を聞いてからだ。」

「まず君には魔力がある。属性はわからないけどね。それに、君は剣を使ったようだけど、君に

適性のある武器種は別のもの。鎌と刀と蛇腹剣かな。これらを使つたら君はとても

強くなる

「よ。」

「ふーん、信じられんがまあ、今回は乗ってやる。ってスマン上から目線過ぎるな。人間ごときか

吸血鬼に向かって。まあ、よろしく頼む。」

うん、全然信用ならん。けどこう言ったことに挑戦するのも面白いかもしれぬ。今までは両親の

言うことばかり聞いていたけど今回は自分で行動しよう。

「吸血鬼っていつ気づいたの？」

「ん？そりゃ、お前が話してるときに犬歯が見えたし。」

「ルヴィ……。」

「ん？何？」

「ルヴィ・ノワール。僕の名前。ルヴィってよんで。」

「いや、馴れ馴れしいにもほどがある。ということでもワール「ルヴィ」……」

「ノワ「ルヴィ」……n「ルヴィ」……。分かったよルヴィ。それで、聞きたいんだが、

「ノワ……ルヴィの家族構成は？」

「両親と兄と姉だよ。あ、後僕ね。」

「わかった。じゃあ行くか。あ、血を吸われても吸血鬼にはならないんだよね？」

「ん？そうだよ。」

「ならよかった。血を吸われたときはどうしようか？」「まあ、悪夢は見るかも。」……。」

そのあと、色々不安に思いながらもノーワ「ルヴィ」……ルヴィの家に行くことになった。断られないよな？

こんな底辺の人間ごときが行っても。いや、ルヴィの家族だ。大丈夫なはず。

霞 美香（主人公母） side

私は息子の遠也を呼び出した。何せ戦闘の結果があまりにも悪いのだ。あれだけ練習を

しているのに上がらないのはおかしい。そう思い問い詰めたが。出て行ってしまった。

日 どうしよう、言い過ぎた。人形なんて言ってしまった。明日には帰ってくるはず。明日

謝ろう。

しかし、次の日になっても、一週間たっても遠也は帰って来なかった。

どうやら俺は紹介されるようだ（意味深？）

俺は早速ルヴィイの家にいくことになった。ただ、俺はお礼するための物を持っていない。さらには世界でも嫌われている「霞家」の次男。

普通はこころよく迎えられることなどない。そう思うと気分が暗くなる。

「大丈夫？ さつきからぶつぶつ言ってるけど。」

「ん？ ああ、大丈夫だ。なんでもない。気にするな。」

「そう？ わかった。あ、じゃあ、僕の家に行くまで僕の家のことを紹介するね。」

どうやらノワール家は吸血鬼の家のなかでも上位に君臨するらしい。そんなところへ俺は行くのか。命たりるかな？ まあ、それよりも母親は最凶、父親は最恐、兄は最狂、姉は最強といわれているらしい。ルヴィイは統率者といわれ、この四人に有無を言わず命令やら頼み事をするらしい。

「さあ、（ ）が僕の家だよー」

「え!？」

指を指された所には大きな屋敷があった。俺の家も大きめだったが、この家は更に

4倍は余裕でありそうだ。使用人（メイド&執事）は合計65人らしい。・・・けたが
違いすぎる。世界は広いなあ。

「あ、でも最狂とか色々言っただけど狂ってる訳じゃないからね。おかしいほどに強い
って意味だからね。」

「おう、分かってるよ。そんなに慌てて説得しなくても。」

「ただいま。」

「おかえりなさいって、あら。あなたは・・・。」

そう言いつつ出てきた女性は俺をにらむ。恐らく霞家だから警戒してるんだらう。

え？

何故みんな姿を知ってるかって？町に危険人物としてはられてんだよ。はあ、また霞
家

だからあることないこと言われて追い出されるんだらうな。・・・慣れてるけど。

「あ、お母さん。この子さつき話して家を出たらしくて連れてきちゃった。」

「は、初めまして。か、かす、霞 遠也・・・と言い・・・ます。」ビクビク

「霞・・・あなた、もしかして霞家の。」

やっぱり名字でバレるよな。この後どうなるんだらうか。殴られて罵られるならマ

シな

方なんだがな。まあ、どうなつても俺を心配するやつなんていない。

「は、はい……。すみません。迷惑ですし話したくないですね。失礼します。」

「ちよつと待ちなさい。あなた、本当に霞家？」

「はい、霞家です。いえ、二時間前に抜けましたが。なので、今は何処にも……。

それにしてもどうしてその様な質問を？」

「いえ、霞家にしては威張らないし少しおかしいって思つてね。」

なるほど。確かに俺の家族は皆を見下した感じがする。上から目線だし。はあ、なん
で

上から目線なんだろうな。意味わからん。

「そうですか。すみません、家族たちが不快にさせるような態度をとつてしまい。」

「大丈夫ですよ。それよりも、家に入ったらどうですか？」

「すみません、失礼します。」

ん？態度がまるつきり違うつて？そりやそうだ。わざわざ自分を……いや、自分た
ちを

恨んでる奴らに生意気な態度をとればそれこそ火に油を注ぐことになる。

「あの奥にお父さんがいるから先に行つてね。」

「わ、分かりました。」

早速ラスボス登場でした。はあ、どんな風に追い返されるんだろう。いや、この考えは

入れてくれたルヴィ母とルヴィに失礼だ。

コンコン

「はいれ。」

「し、失礼します。」

「君は？今日はお客は来ないはずだが。」

「いきなりすいません。僕は、いえ、私は霞 遠Y「なんだとー!」っ!」

「貴様らは！従兄弟の家をメチャクチャにしたと思つたら今度は私の家か！いい加減にしろー!」

「……は？いまこの人はなんて？俺の家族がルヴィの従兄弟達の家族をメチャクチャに……。」

あいつらはこんなことまでしてたつてののかよ!

「もうし今日という今日は我慢ならん!覚悟しろ!ここで成敗してやる!!」シャキン!

「少し話を「黙れ!」痛っ!」

「なにが痛いだ!従兄弟のほうがもつと痛かつたわ!!こんなんで泣き言を言うな!!」

俺はなにもしてないのに、家族の尻拭いか。それもそうか。それほどのことを母親は……

いや、あのクソ共はやつてきたもんな。

「あなた！落ち着きなさい!!」

「うるせえ！こいつは俺の従兄弟を!!」

「彼は関係ないわ!!」

「大丈夫?」

「……クソがアアアアアアアアアアアア!!」

「「っ!!」」

「「いったいどうした(の)！」」

あいつらのせいで俺がこんな目に!!俺には家族に味方がいない。だから他の人に頼もうと!

なのに、なのに……

「何なんだよ!あのクソ共はこんなことをしてたのかよ!どういうことだよ!家族を壊したって!」

俺に家族の大切さを厳しく言っていたのに!結局自分らは守れてねえじゃねえか!!

結局俺は

あいつらの尻拭い！あいつらのせいで！」

「えー！いったいどういうことだ！あいつは霞家の次男で！」

「あなた、此方にきて。あの子についてルヴィイが教えてくれたことを話すわ。あなたたちを彼は彼を

何とかしてちょうだい。」

「「わかった。」」

あいつらは何もされないのに俺の時だけ！家族からは人形やガラクタ扱い！外からは危ない人と

友達も誰もいない。俺は何を支えにして生きれば良いんだよ……。あ、あそこにちようど

ナイフがあるじゃん。あれで自分の首をかつ切れば楽に……。

「止めなさい!!」

「止めるな！こんな生きる価値も存在する価値もないやつは死ぬだけだ!!家族からはガラクタ扱い、

外からは危ない人。どうすればいいんだよ！教えてくれよ！誰か……。助けて……。くれよお。」

周りは闇。俺に死ねと囁く殺意。消えろと命令する悪意。救世主なんて存在しない。

なら自分で

自分を殺めれば楽になれる。誰も助けて（殺して）くれないなら自分でやるだけ。そう、それだけ。

ギョッ

「つ?!何だよ。同情するなら殺してくれ「ゴメンね」・・・なんでお前が謝るんだよ。

俺の家族が悪い、俺が悪いのに。俺さえ強ければ他の奴等は俺の家族になにもされなかった

はずなのに。どうして・・・お前・・・が・・・。」

「ゴメンね。君がこんなに辛かったのに全く気がつかなかった。」

「気がつかないのが普通だよ。そもそも俺を気にかける奴がいなんだから。」

するとルヴィの母親と父親が部屋に入ってきた。

「さつきはすまなかつた。君にも事情があつたのに。」

「いえ、大丈夫です。俺なんかに、ガラクタ何かに謝らなくても「遠也君？」ん？ひつ!?
何だ

ルヴィー！怖いぞ!?!」

「いま自分のことをガラクタっていったよね?」

「そんなこと今は「言ったよね?」・・・はい。」

「じゃあ、向こうではな死しようか。」

このあと、こっぴどく叱られました。でも、俺のことを心配してくれて嬉しかった。これからは

ルヴィの家で暮らしたいと思えた。

特訓が始まる・・・と思つてました

「まずは自己紹介をしようと思う。私はレジン・ノワール。ノワール家の当主だ。そしてこちらが妻の」

「ナティア・ノワールと申します。よろしくお願ひします。」

「あ、いえ、固い言葉づかいじゃなくて良いですよ。むしろ僕が敬語じゃないといけないのに。」

レジンさんとナティアさんの許可が出たことによつて俺はここノワールの性を名乗つて生活することになった。というか、根本的に名前をかえることになった。

名前は『トール・ノワール』になった。この時はルヴィも大喜びしていた。

「じゃあ、家族になるんだからお互い遠慮なしにしましょ。私はお母さん、

旦那はお父さんでいいわよ。」

「はあ、分かりま・・・分かつた。それで、そちらの二人は？」

「僕はタル・ノワールです。よろしくお願ひします。」

「私はターニャ・ノワールよ。元霞家だからといつて調子にのらないことね。」

どうやらターニャはあま良く思つていないようだ。まあ、今までの仕打ちと比べれば

軽いけどな。いや、本当あのときは地獄だった。

「調子に乗るつもりはない。そもそも俺はなんの力もないただの人間だからな。

あいつらとは違いいわゆる出来損ないって奴だ。」

「もう！またツールは自分を蔑ろにする。またおはな死されたいの？」

「いえ！滅相もございませぬ。だからその笑顔をしまってください！（精神的に）

死んでしまいます！」

ルヴィのおはな死は・・・あかん、思い出しただけで震えがアガガガガガガガ！

とまあ、茶番はこのぐらいにして、

「もう、分かったから土下座しないでよ・・・。」

「まあ、それは置いといて、俺はどんな訓練したらいい？」

「じゃあ、まずは属性の適性をみよう！」

属性の適性・・・なんだろ、オヤジギャグに聞こえる。いや、タルが意識して言っている
訳ではないと言うのは知ってる。でも・・・ねえ・・・。

「属性から？まずは魔法の適性からじゃないのか？」

「いや、前にも言ったけどツールには魔力があるよ。ようするに魔法が使えるってこと。

ただ今は何かの封印をほどこされてるから魔法が思うように使えないだけ。ただ属

性

付与は出来るからね。」

「なるほどな。なら、調べようかな。」

適性を調べるのは簡単だった。ただ単に魔力を感知する魔石に手を近づけるだけらしい。

炎は赤、水は青、氷は水色、雷は黄色、草は深緑、風は黄緑、地面は茶色、無属性は銀色、闇は青紫、光は白、複数属性はマール状になるらしい。

「これがその魔石だ。手をかざしてみろ。」

「分かった。こういう感じか？おやじ。」

「うむ。というか私はおやじと呼ばれるんだな……。少し悲しい。」

「あ、色が変わりましたよ！えくと、赤と水色のマールですね。」

「ふーん、と言うことは氷と炎の複数属性なのね。なかなかやるじゃない。人間のくせに。」

複数属性……。でも二種類だろ？俺の兄と妹は光、闇以外使えるから……。

「あーつと、一つ気になるんだが、この黒とも紫とも言えない色はなんだ？」

「なんだろ？少なくとも僕は見たことがないね。お父さんは？」

「いや、私もないな。初めてだ。」

「まあいいか。さてと、次は何をするんだ？」

「次は刀と鎌と蛇腹の使い方を練習するよ。知り合いの吸血鬼に全ての武器を使える人がいるから付いてきて！」

そのまは俺は手を引つ張られ、敷地内の戦闘練習場のようなどこへついた。そこには白い髪をした女性が立っていた。見なくても分かる。あれは敵に回してはいけない。ん？そう言えば元霞家の時点で全員敵になるじゃん。・・・せめて誕生日位は祝って欲しかった。というかそもそも俺の誕生日だったっけ？

「あー、君がー元霞家の人ー？ふーん。ってことは優秀なんだねー。」

「あ、旧名は霞 遠也、本日からツール・ノワールになりました。今日からよろしくお願い「やだー」・・・。」

「だってー、あの霞家でしょー。教えたくないなー。そうだねー、霞家はドラゴンをソロで倒せるんでしょー。じゃあ、見せてー。倒せたら合格ねー。」

ドラゴン・・・魔物の中でも最高ランク。鱗は鋼より固く、牙や爪は刃より鋭い。属性はあるが、魔法が得意な魔法。中には知能があるドラゴンもいる。

普通倒すために20人は必要になる。

はあ、ドラゴンを倒せ！私たちから見えないところで死んでこい。なんだろなあ。

「ちよつとカーラちゃん!!ツールに無理難題を！」

「いいよ、ルヴ「ねえー？ルーちゃんと話さないでくれる？」・・・。」
「それでねー、早く行つてくれると嬉しいなー。」

俺は行くことにした。そうしないと認められない。それに認められなくても事故満
足は

できる。それに唯一優しかったメイド長と執事長も言つてたしな。

『後悔は行動をしてから言いなさい。行動せずに言うのはただの傲慢よ。』

『まずは行動をしてください遠也様。そうしなければ見えるものも見えなくなつて

しまいます。』

つてな。じゃあ、俺はやつてから後悔するぜ。後悔すること前提だが。それに、後悔
は

した。もうするだけ後悔した。後は動く。それだけ。

「そう言えば武器はないな。・・・はあ、格闘で挑むか。」

ドラゴンのいるレヴィオン山に向かう。そこには山賊がいるらしいからまあ、武器は
手に入る

と思う。最悪、見つからなければそこまでと言うことで腹を括るだけ。

「行くぜ、ドラゴン。いや、レヴィオン山のドラゴンの名はマンティコアだったな。

マンティコア、覚悟してろよ。・・・とか言つてるけど勝てないしそもそも聞こえな

い
か。」

その頃のレヴィオン山の禁域

マンティコアの近くに小鳥が近づき、鳴いている。

『ん？私を倒そうとするやつが来るのか？なに？武器も持っていないのに覚悟しろ？ハツハツハ。こんなに愉快なやつがまだいるか。少し興味があるな。殺さずに話でもしてみるかな。久しぶりに楽しめそうだ。ガツカリさせるなよ。』

マンティコアの目は愉快そうだった。そして、目を輝かせ、今か今かとツールを待つ。後に森の生き物は『あんなコア様は始めて見た。』と生き物どうし話していた。

急展開!?! マンティコアと話して訓練して、あとあと!!

レヴィオン山のマンティコアを目指してはや3日、ようやく麓に到着した。

どうやらマンティコアは山頂付近にいるようだ。・・・標高2500メートルなのにこの薄着でいけて・・・。

「はあ、防寒着くらい貰ったら良かったな。はは、はやから後悔してるわ。」

マジで凍死しても仕方がないと思うくらい寒い。これから登っても1週間近く掛かるかな?そして野宿と。何処のサバイバル生活なんだか。はあ、転移魔法使えたら楽なんだろうな。とか思いつつ歩いて三時間たった頃に薄く影が連なっているのが分かった。

「なんだ?・・・見た感じ何かの群れっぽいけど。オオカミだったらヤバイな。」

どんどんその群れがこちらに来るのが分かる。数はパツと見50体といったところ。「ちよつと、影に隠れていよう。ちよつどいい岩影があるしな。」

急いで岩影に隠れた。そのすぐあとに群れと思っていた軍隊のような人たちが通った。

ボソボソと聞こえたので耳をすます。

<なんだよ、あのドラゴン。レベル60の騎士が一撃だぞ。>

<勝てるわけがねえよ。国の騎士団最強と言われた方が軽々・・・。>

<ステータスオール800はあるのに・・・。>

うっそ、レベル60が一撃かよ。俺のレベルは・・・

名前 〈旧〉 霞 遠也

〈現〉 トール・ノワール

レベル 13

職業 村人 (レベル10)

体力 25

防御力 40

技術力 120

魔力 |

・・・低い?いや、技術力はまあまあな方だけど。こんなんで勝てるのか?他のステータスも

タスも

見てみるか。

素早さ 112

攻撃力 (未装備) 250

精神力 687

て
・・・精神力だけが異常なのは気のせいかな？ いや、攻撃力も高いけど。あれ？ 村人

全てのステータスがレベル100でも150いくかいかないか。そうかんがえると高いのか？

まあ、それがどんなんでも、1つ確定してることがある。それは・・・

「俺瞬殺されるじゃねーかー!!」 あー！あー！あー！あー！ (こだま

でも、ルヴィにあんなこと言ったら諦める訳にはいかないな。よし、覚悟はできた。逝こう。

「つていつても一週間かかるしな。」

ん？ 面白いやルヴィに話すことを怒られて何もいつてねえや。失敗失敗。

ええ、つきました！一週間と少しかかりました!!意地でも突き進みました!!文句ありませんか!

．．．俺、誰に怒鳴ってるんだろう。まあでも、ここから先は禁域、気を抜かないぞ!!

「たのもーう!!七大家の霞家最弱の男の登場だー!．．．すいません、テンション可笑しく」

なってます。って、誰に謝ってんだ俺は!あーもう、勝負じゃー!」

『うるさいのう。誰じゃ?ワシの眠りを邪魔するものは?』

「俺だ!マンティコアと戦闘を(強制的に)挑む!!(命令された。)」

『おぬし、死にたいのか?それでもよいなら相手になるが?』

「あー、まあ、俺が死んだってねえ。ただの人形だからさ。ほら、お前も興味のない

人形が壊れたって気にしないだろ?だから俺が死んでも全然OK!!」

いや、ルヴィには怒られるだろうけど、まあ、こうでもしないと恐怖が．．．マン

ティコア

から物凄いプレッシャーが。アガガガガガガ。

『なるほどの。だが、ワシがお主に興味があると言ったら?』

「マンティコアができ損ないの俺に興味?あり得ない．．．よね?」

『すまん、ワシはもうとつくにお主に興味がある。まず1つ、ワシの言葉を聞くことが

出来ていること。ワシの声は本来ドラゴンやその他の生物にしか聞くことができな

い。

なのにお主は聞き取ることができている。』

あるえ？ そうなの？ いや、正しくは聞き取ると言うよりもそう言っているような気がする

する
つてだけなんだがな。あくまで”気がするだけ”・・・。

『お主、ワシはお主の心を読めるからの。』

「あ、そつすか。それで、戦闘してくれませんか？」

『そうじゃの。お主と戦闘してもいいことないからの。基礎能力の底上げなら手伝ってやるぞ。どうじゃ？』

「おお、それはありがたいな。でも、人間に肩入れはいけないと。」

『ワシは面白いものの味方で、お前の味方ではない。』

結局基礎能力を強化することに決まりました。時間的には半年かかった。予想以上に

かかった。ちなみに、特訓後の能力はこうだ！

名前 トール・ノワール

レベル 87

職業 錬金術師

体力 7850

防御力 5680

技術力 8700

魔力

素早さ 11700

攻撃力(未装備) 12500

精神力 16800

もはや化け物レベル。マンティコアも『ここまで早く成長するのは初めてじゃ。お主は

やっぱり面白いの。』ってさ。さてと、急いで帰るか。というか俺もう死人扱いじゃね？

はあ、今帰ったらルヴィのおはな死が来るだろうなあ。

「ティア、俺はもうそろそろ帰るわ。ありがとな。」

『そうなのか。これからよろしく頼むぞ。お主についていくからな。』

「・・・はい?」

『安心しろ。小さくなってお主のポーチに入っておるから。さあいくぞ!』

「はいはい。跳ぶぞ。」

俺は一回思いっきり地面を蹴る。俺の居たところはもう見えなくなった。あ、ちなみに9メートルのクレーターが発生したのは分かった。跳んで40秒ほどでノワールの屋敷

が見えた。

「えーと、チャイムチャイム。」

ピンポーン

「はい、どちら様・・・で。」

「あーと、お母さん。ただいま。」

「・・・え？み、みんなー！急いで来て!!」

ハハハ、こんなに慌てる母さんは珍しいだろうなあ。おおう、めつちや来た。・・・う

わあ、

カーラと呼ばれた奴もいるよ。

「遠也、じゃなくてトール!!どうやって!?!あれから半年も!!」

「あく、今から説明するわ。」